



## 日本におけるレンゲの栽培管理

(『レンゲ全書』安江多輔編著・(社)農山漁村文化協会刊より・一部養蜂関係者と佐藤芳博の栽培経験から)

レンゲの学名は、*Astragalus sinicus* L.といい、*Astragalus* は、「距骨」(足首の骨を形成する骨片)を意味し、その原産地は中国とみなして命名されたものです。なお、*Astragalus* 属(レンゲ属、モメンズル属)はマメ科の中でも大きな属で、中央アジアに多数の種があり、その数は 1,200~1,600 種といわれています。中国における名称は現在では「紫雲英」および「紅花」が一般的に用いられています。日本における名称は現在最も多く用いられているのはレンゲ(レンゲゾウ)で、次ぎがゲンゲですが、ゲンゲは多くの地方において老人に多く用いられ、若い人たちはレンゲを用いることが多いようです。英名では Chinese Milk Vetch ですが、Renge, Genge, a kind of Vetch, Pink clover などの記載もみられます。

### 1. 栽培の適地

マメ科植物は深根性であり、その根に共生する根粒菌の繁殖のために乾燥が必要です。過湿な土壤は根粒菌の繁殖を妨げるので、レンゲの生育が悪く、凍害を受けやすくなります。

### 2. 適種の選択

栽培上重要な品種の特性としては、早晩性、耐寒性、耐雪性、耐湿性および耐病性などがあります。

### 3. 播種の準備

播種時の乾燥程度は田面を歩くと足指の間にわずかに土が出るくらいが適当です。

### 4. 種子の予措

硬い実が多い場合には、砂つき法によって磨傷処理を行なうことが望まれます。(多賀城での実験では、ミキサーに種と砂を入れて傷をつけてから根粒菌をまぶし、空に投げ上げて播種した場所は発芽率が良く、山砂利の通路に傷をつけないで蒔いた種が、見た目には一番発芽率が良かったようです。-----佐藤芳博)

### 5. 播種期

播種適期はその地方の気候と水稻の作期によって異なりますが、霜の降りる1~1.5ヶ月前です。(地球温暖化でかなり播種時期が遅くても開花するようになりました。宮城県ですと、9月下旬まで可能な場所があります。関東地区は9月中が良いようですが、暖かいところは、10月下旬まで可能です。-----佐藤芳博)

### 6. 播種量(末次・岩切による 1950 年資料)

東北・北陸	3.0~4.0kg/10a
関東・東山・中部・東海・近畿・中国	2.5~3.5kg/10a
四国・九州の暖地	2.0~2.5kg/10a

### 7. 播種方法

覆土の厚さは1~2cm が適当であり、5cm 以上になると出芽が悪くなります。薄播する場合には、等量の砂を混ぜて播種すると均一に播種できます。(覆土をしなくても芽は出ます。----佐藤芳博)

### 8. 根粒菌の接種

レンゲが栽培されたことのある土壤中には根粒菌がいるので、接種しなくてもレンゲは良く生育しますが、レンゲを初めて栽培するところや根粒菌の着生が少ないところでは根粒菌接種の効果は大きいようです。根粒菌は好気性細菌なので、その活動を旺盛にし、窒素固定能力を高めるためには、排水に注意する必要があります。

## 9. 湿害対策

レンゲは生育初期の約1ヶ月間、とりわけ発芽当初の 10 日間は浸水に対する抵抗力が特に弱いので、冠水しないよう排水対策が必要です。湿害対策のポイントは、秋季に雨水が田面に停滞しないようにすると共に、春先の雪解け水が停滞して過湿にならないように排水溝を設置することです。

## 10. 採蜜(養蜂関係者の話による)

アルファルファタコゾウムシの食害により、レンゲ蜂蜜の収量が減少しているといわれていますが、沖縄で蜂蜜を増やし、花が食害に遭う前に早めに採蜜すれば、収量は減ることはなく、現にそのようにしている養蜂家もいます。

## 11. 四季咲れんげ美濃紫雲(株種萬社のリーフレットより)

周年利用の蜜源および観賞用の品種、同時に緑肥および飼育用としても利用できる多目的品種です。

### 【四季咲れんげの特性】

春～夏蒔(4月～7月)、夏～秋蒔(8月～10月)に両用できるので、播種期をずらすことによりほぼ1年中開花させることができます。(低温に遭遇しなくても開花します。)

極早生で4月～7月に播種した場合には、1ヶ月～2ヶ月で草丈 10cm 前後で開花を始めます。

8月～9月に播種した場合には、その年の9月～11月に開花を始め、翌春5月頃まで開花し続けます。

10月以降に播種した場合には、普通のレンゲ同様、翌春開花しますが、開花は早いようです。

9月下旬～10月上旬(レンゲの播種適期)に播種すると草丈 30～40cm、茎数 15～20 本となります。

## 12. 美濃紫雲の栽培から学んだこと(佐藤芳博)

深い植木鉢を用意します。(根がかなり伸びるので、浅いと成長を阻害します)

肥えた土を入れます。(庭の土で結構ですが、油粕をいれるとさらに良いようです)

種が硬く発芽しにくいので、砂などで種子の表面に傷をつけると良いようです。

種子に根粒菌をまぶして、すぐに蒔きます。(根粒菌の代わりにレンゲが開花して種ができた場所の土を利用しても良い)

水はけが悪いと腐ってしまうことがあるので、鉢植えの時は、特に注意が必要です。

直播きのときは、水はけの良い場所を選びます。

植木鉢を吊ると、鉢の周りにレンゲの花が広がり、綺麗に生育します。

花が受粉し、緑色の種になり、鞘が黒くなってしばらくすると、種が散ります。その前に採種を始めください。全ての花が種になり、茎が枯れたら刈り取って、鉢の土か、他の場所にすき込んで肥料にしてください。同じ植木鉢の土(レンゲの生育ですでに根粒菌が土中にあります)を柔らかくしてから採れた種を蒔いてください。かなりの確率で芽が出て開花します。

以上

(注) 言葉遣いを統一しました。引用文は、原文と一部異なっています。

正式に引用される場合は、原典をご参照下さい。